

第八講 中期ヘラディック期（前 2090/2050～1600）

南アルゴリスのデータ

遺跡数の変化

前期青銅器時代：25

中期青銅器時代：4

後期青銅器時代：18

(T. H. van Andel/ C. Runnels, *Beyond the Acropolis*, p.162, Table 2.)

人口の変化

前期青銅器時代 I - II : c. 1, 900

前期青銅器時代 III : c. 375

中期青銅器時代 : c. 475

後期青銅器時代 : c. 1500

(M. H. Jameson, C. N. Runnels, T. H. van Andel, *A Greek Countryside*, Table B.3)

(1) 前期ヘラディック III 期の問題

前期ヘラディック III 期と連続

前期ヘラディック期〔文明へのテイク・オフ〕に比べて、常に《後退》ないしは《沈滞》の時代と評価されて来た。

(理由) 生活水準の低下、初歩的な社会構造、共同体間の結合力のゆるみ、

知覚できるほどの経済成長の敢然な欠如

物質生活の画一化は平等化とプレーキの徴候とみなされる

他方では特殊地方化も認められる⇔共通性の確実な後退の結果

前期ヘラディック III 期は文化的には中期ヘラディック期に属する

(理由) 教会後陣型家屋（永住型でなく最大 2～3 世代）の普及、轆轤の普及、

単色灰色のミニュアス式土器、居住地内埋葬の再発

⇓

これらは前期ヘラディック II 期末の完全な破壊によって、レルナ、アシネ、ティリンス、ズグリエス、ハギア＝マリナ、キッラのような多くの遺跡で先行して現れているので、人々は新しい民族、《ミニュアス人》とか或いは《原ギリシア人》の到来を表わす者だとみなして来た

最近の研究はこのような見解を修正している

・断絶面はレルナでは非常にはっきりしているが、アイギナのコロナやティリ

- ンスの下町では非常に僅かであり、地層線は《移行》を雄弁に物語っている。
- ・加えて、ラコニアのような幾つかの地方では、このような断絶層のあと前期ヘラディックⅢ期を特徴付ける痕跡は全く発見されていない。
 - ・中部ギリシアでは、前期ヘラディックⅢ期の初めの後になって新しい文化的要素が現れている。

2種類の飲料用の器：《ウーゾ型カップ》と《タンカルド》（または《トロイ型茶わん》）

前期ヘラディックⅢ期の特徴：

原ミニュアス式土器の他に、形態と技術の多様化、地域特性の文化（前期ヘラディックⅠ～Ⅱ期と対照的）

アドリア式土器：全面線刻に覆われた、或いは肩の部分に乳頭に満ちた内地産土器

白色の線刻ないしは押紋土器：アルゴリス、コリントス、エーリスに認められる
タルマニアないしはトラキア、或いはダルマティア等のバルカン半島で制作

（2）前期ヘラディックⅢ期から中期ヘラディックⅠ期への移行

アドリア式土器の消滅、灰色ミニュアス式土器の発展、磨研土器の拡大、キクラデスのものと類似した鈍彩土器

エウトレシスやコラクーのような幾つかの遺跡では前期ヘラディックⅢ期末の破壊の痕跡が存在しているにも関わらず、全ての遺跡は中期ヘラディックⅠ期への推移は暴力的な破壊を伴っておらず、曖昧な第二次の民族移動を伴わない内部的な発展過程と一致している事を暗示している。

その後の発展過程はほとんど知覚できない。

土器様式に基づく中期ヘラディックの3時期区分は明白ではないし、別の地域のものとは位置しない。特に中期ヘラディックⅡ期。

↑

考古学の方では理論的に設定された3時期区分を無視している

（3）土器の主要な二つのクラスの系譜

〔1〕 ミニュアス式土器

前期ヘラディックⅢ期の間は周縁的に留まり、たった一つのタイプ（二本の

取っ手の付いた腹部が丸く出た壺) しかなかった。

中期ヘラディック期の初めに質・量共に増加。

技術の変化⇨灰色ミニュアス式土器、黒色ミニュアス式土器、赤色ミニュアス式土器

形態の多様化⇨二本の取っ手の付いた深鉢 (=カンタロス)

その後土器はますます角張り、しばしば線刻で装飾される。

中期ヘラディック期中ごろ：《古典》タイプの時代

客部に溝を彫ったゴブレットの大流行

新しいミニュアス式土器の技術の出現：黄色ミニュアス式土器、中期ヘラディックの末まで拡大を止めない。

最終局面で・・・土器底面が磨研される傾向

クレタやキクラデスの影響を受けた大量の小型土器
鈍彩で時として装飾される

[2] 鈍彩土器

類型的な発展はミニュアス式土器の類型的発展による直接影響を受けている
最初は技術的に比較的粗末で、直線という幾何学的モチーフと明色地に暗色、水平線という構造。

その後の技術的発展：先ずスパイラル等の曲線のモチーフ、次いで鳥や植物等の具象的なモチーフを使用。

中期ヘラディックⅢ期：様式の多様化、張り綱による装飾、暗色地に明色によるモチーフ、二色スタイルの出現

[3] 地域差

灰色ミニュアス式土器：

中部ギリシアでは豊富、ペロポネソスでは稀。

黒色ミニュアス式土器：

本質的にはペロポネソスの土器、コリントス以北では殆ど発見されない。

黄色ミニュアス式土器：

分布は比較的広範囲であるが、エウボイアでは証明されず。

鈍彩土器：

フォキスやエウボイアでは僅か、ペロポネソス北西部には存在せず。

磨研土器：

(3) 中期ヘラディック期末 (前 1650 年頃) : MHIII~LHI

MHIII : 1700/1650~1600

LHI : 1600~1500

中期ヘラディック期から後期ヘラディック期への移行期

- ・ミケーネにおける竪穴墓 (shaft grave) の出現 / メッセニアではソロス墓

円形墓 A : 1871 年にシュリーマンとスタマタキスによって発見

6 個の竪穴墓 (I~VI) を含む

後期ヘラディック I~II 期 (前 1600~1500)

3 世代に亘って使用される

周囲 150m、

後期ヘラディック III B 期に城塞の中に組み込まれる

III、IV、V の副葬品は非常に豊か

IV の場合 : 男性 3 人、女性 2 人。

黄金のマスク 3 個出土、金製の腕輪 8 個、マスク 2 個、金製の壺 5 個、銀製の壺 11 個、青銅製の壺 22 個、アラバスターの壺 3 個、ファイアンスのリュトン 8 個、金のリュトン 2 個、銀のリュトン 3 個、リュトンの中には町の包囲が描かれているものがある、青銅製の剣 27 振り、柄の部分に象牙や金を使用。

円形墓 B : 1950 年代にミュロナスにより発見

円形墓 A に先行、円形墓 B の最後のものが円形墓 A の最初のものと同じ時期に属する。

中期ヘラディック後期~後期ヘラディック II 期

(前 1650~1550)

7 世代

土器が多い。他に青銅製の剣等が出土。

中期ヘラディック期における宮殿の痕跡 (フレスコの断片)

ミケーネ、ティリンス、ピュロス等

⇓

各地に宮殿を中心とする王国の存在

都市の発展

四角形のメガロン式の住居